龍樹造・中論無畏疏

寺本婉雅譯

解題

龍樹の造、「根本中(論)無畏疏」(Mūra-madhyamika-vṛitti-akuto-bhaya, dBu-ma Rtsa-baḥi ḥGrel-pa Ga-Las-ḥJigs-med)は西藏翻譯家 mDo-Sde-bBar の藏出にして、此の中論本頌はKluḥi Rgyal-mTshan(龍幢)の譯出であり、孰れも西暦九世紀年代の人である。(丹珠爾部 Tsa. XVII, p. 34a-114a)(本偈は同函 XIII. p. 1-22b.にあり)、龍樹の異名なる龍勝造の「順中論」を釋せる無著の「順中論釋」(元魏瞿曇般若流支譯)の序に、

「諸國語、中天竺正、彼言那伽夷離淳那(Nāgārjuna)此云龍勝、名味皆是上世德人言龍樹、片合一廂、未是全當、龍勝菩薩、道勝之師、依大般若、而造中論衆典」

とあり、又「大乘稻竿經隨聽疏沙門法成集」にも是と同樣に、龍猛は大般若經に依て中論等を造る旨を記してゐる。

「佛滅度後六百歲已來、部執競興、多著有見、諸大乘法、毀滅眞宗、南天竺國有菩薩、出現於世、號爲龍猛、證極喜地、爲破有無見、依大般若等大乘之經、造中論等、後彼師弟子聖提婆等諸大

論師、亦造二百論等一、廣闡二大義一」

「法成」(Chos-Grub) は唐末時代の西藏人——唐古忒(タンカト)人種の出にして、漢藏兩文に達し、藏文經論を漢譯し、漢譯經論を藏譯せるもの多數あり、甘珠爾部、丹珠爾部中にその數二十餘種に上る。

「付法藏因緣傳」にも「又造二無畏論十萬偈一、中論出二其中一」とあり、これは恐らく藏譯の「根本中論無畏疏」を指示せるものであらう。而して茲に言へる十萬偈とは「十二門論」・「六十頌如理論」・「七十空性偈」・「廻諍論」等の全部を包含せる偈文を意味する總稱であらう。玄奘三藏の言へる「無畏論」所收の「中論」とは、蓋し「中論」本偈のみを指示せるもので、羅什譯の「中論」(青目の釋)を指稱したのではなからう。ブトン、リンボッェ (Bu-Ston Rin-po-Che) の造、「善逝印度佛敎史」(p.176) には、「中論無畏疏」は龍樹の造なることを認めてゐる、曰く。

一、「根本中(論)偈智慧一品、及首盧迦百四十」、阿闍梨龍樹の造、龍幢の譯 (dBu-ma Rtsa-baḥi Tshig-Leḥur Byas-pa Çes-Rab Bam-po-gCig daṅ Çu-Lo-ka bRgya-bShi-bCu-pa Slob dPon Klu-Sgrub-Kyis mDsad-pa Kluḥi-Rgyal-mTshan-Gyis-ḥGyur)。

二、「根本中(論)無畏自疏」七品、ドーデ、ヴル譯、(dBu-Ma Rtsa-baḥi *Raṅ-kGrel* Ga-la-ḥJigs-med Baṅ-bo bDun-pa……mDo-Sde ḥBar-Gyis-ḥGyur)。

ブトン師は「中論無畏疏」は龍樹の「自疏」(Raṅ-kGrel ; sva-vṛitti) であることを認めてゐるから、特

に「中論無畏疏」の題號中に「自疏」の字を加入して記したのである。

漢譯「中論」の青目菩薩註釋は確かに藏譯の原本を底本とし、それに依て重釋を下したる痕蹟の存することは、何人も藏漢兩譯を比較することによつて窺知せらるゝのみならず、漢譯の長行は多量に青目自身の意見が加入され、龍樹の「中論」本頌の眞義を率直に傳へてゐない。併し藏譯の本論は頌疏共に龍樹の自著にかゝり、是に依つて龍樹の造論の本義を窺知せらるゝであらう。「中論無畏疏」の歸敬序に「八千般若經」(Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā, Ḉes-Rab-kyi Pha-Rol-tu Phyin-pa)を引用して曰く、

「須菩提よ、こは如何に思惟するや、總て心を滅せば、そは再び生じ得るや、答て言く、世尊よ、そは(生せざる)なり。曰く須菩提よ、こは如何に思惟するや、總て心を生せば、そは滅法を有するや、答て言く、世尊よ、滅法を有せざるなり」。

云々と、これは漢譯「中論」の序に、「如二般若波羅密中說一、佛告二須菩提一、菩提道場時觀二十二因緣一、如虛空不可盡」とある文に相應すべく、「順中論釋」、「大乘稻竿經隨聽疏」等に言へる大般若經等に依て中論等を造るとの文に照應すべく、青目の言へる如く「佛滅後五百歲の像法中、人根鈍にして諸法に深著し、十二因緣、五陰、十二入、十八界等の決定相を求めて佛意を知らず、但文字に著し、大乘法中に畢竟空を說くを聞き、何の因緣の故に空なるを知らず、卽ち疑を生じ、若都て畢竟空な

らば、云何が罪福報應等を分別せん、是の如きならば則ち世諦第一義諦なからんと。是れ空相を取つて貪著に著し、畢竟空中に於て種々の過を生ず、龍樹菩薩是等の爲めの故に此の中論を造つた」ので、「中論」の「觀因緣品」は本論二十七品の主要論題にして、その餘の二十六品は、第一品「觀因緣品」の原理を應用して種々の問題を解釋せしに過ぎないのである。「中論」は一般に大般若經に據つて空の思想を闡明したものであると謂はれて來たのであるが、その實「八千般若經」に出づる十二因緣の五陰、十二處、十八界等の眞義の誤解を拂拭して、菩提樹下に於ける佛陀の正覺成道の內容としての十二因緣觀の中道を發揚せんが爲めに外ならないのである。故に中論は十二因緣に關する部派佛敎學の異見を訂正するを以て、造論の要旨とするに在て、般若經所說の空思想のみの開顯ではない。造論の思想的根據は、有部派所說の諸法實有を前提とし、之を生滅去來の八不論に一々照應し、一切存在としての諸法は、自性 (Svabhāva, Ño-Bo-Ñid) を根據としての生、住、異、滅的時間的依存關係上の現象なれば、自性以外に永存なしとして否定したるに過ぎない。根本佛敎の緣起觀の如く自性を否定し、更に否定による第四次元の世界を開顯してゐない。卽ち「第一義空の法性、法住、法爾、法如、法不離如、法不異如、如來自知、成等正覺、爲衆生、開演、開示」(「雜阿含經」卷十二、第十四) との絕對空性の開顯にまで徹底してゐないのは、龍樹もまた時代思想の舊套を全脫することが出來なかつたことは寔に遺憾である。只後代三論宗派の正依の論として八不中道哲學を發揮するに至つたこと

は、又別途の理由によるのである。

無畏疏は龍樹の自作に非ずとの疑問に對して、本論は龍樹の自作なりと見るべき左證あり、曰、「そこに前の四句の「滅なし」等に於て、「常なし」等の究竟は、大概自己（龍樹）の宗義の中樞に屬してあるが故に、それ等は詳解し了れり。かのあらゆる外道は餘の宗義に關係するが故に、其等を詳釋すべし。」(p. 36b)

文中の「自己の宗義の中樞に屬してあるが故に」(Raṅ-gi gSluṅ-Lugs-kyi Khoṅs-su gTogs-pa Yin-pas) といふ文意は、正しく龍樹ならでは明言しえざる語である。その他是れに類する文言は處々に散見す。

「觀因緣品」の八不偈文の譯語の相違に就て――羅什譯では「不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不出、能說是因緣、善滅諸戲論」とあり。併し藏譯では「滅なく、生なく、斷なく、常なく、來なく、去なく、異義に非ず、一義に非ず」云々とあつて八無中道論である。是れに照應すべきものは、月稱の造、「入根本中論疏」(Madhyamakā-vatara-bhaṣya; dBu-ma Rtsa-ba-la ḥJug-paḥi kGrel-ba)（丹珠爾部 Ha, XXIII, p. 264b.）の「觀因緣品」にも「八不」でなく、「八無」として譯出してあり、曰く。

「何に依て緣起するや、　　// Gaṅ-gyis Rten-Ciṅ ḥBrel-par-ḥByuṅ /

滅なく、生なく　　/ ḥGags-pa-med-pa Skye-med-pa /

斷なく、常なく　　/ Chad-pa-med-pa Rtag-med-pa /

來なく、去なく　　/ Ḥoṅ-ba-med-pa ḥGro-med-pa /
異義に非ず、一義に非ず　　/ Tha-Dad Don-min Don-gCig-min /
戲論を除滅し、寂滅と　　/ Spros-pa Ñe-Shi Shi /
言へるものを說けり」　　/ Shes-bya-ba-la gSuṅs-So //

梵偈の八句の各語に用ひられてゐる否定的接頭詞の內、子音を以て始むる語の前のaと、母音を以て始むる語の前に用ゆるanとは、何れも「不」、「無」、「非」の三種否定の漢字を以て譯出されてゐる。又副詞のnaも是れと同樣の語義に譯出されて一定してゐないのは羅什も、玄奘も同じである。

藏譯では本論の要旨とせる十二因緣の相依關係上の存在の成立は、「衆因緣生法、我說卽是空、亦爲是假名、亦是中道義」（「中論」「觀四諦品」）の根本原理に依つて八無中道を說かれたのであるとした。

然るに羅什譯は、漢字の音韻上の修辭學によつて生、滅、去、來、一、異、斷、常の各字の頭に「不」の一字を冠して八不中道と譯した。元來否定詞の「不」字は、最後に肯定的意味を詮はし、徹底的空の意を闡明することは出來ない。譬は數學に於ける分數の如く、如何程分母を以て分子を割るとも最後には不分割的分數を殘すものである。八不中道も是れと同樣の關係に於て如何に否定を重ぬるとも、その最終には否定すべからざる肯定的或一物を殘存せしむ、或一物の殘存は解脫を不可能ならしめ、認識論的追窮の對象たらしむ。是れに反して八無中道は衆緣所生の法は卽是空なりと說く。

十二因緣說に對比せば、八中道不說は順觀による相依關係上に於ける存在的現象の說明となり、一切存在は自性(Svabhāva, No-Bo-Nid)上に生滅起伏を示す存在的自性哲學である。是れに反して八無中道說は、逆觀によつて相依關係に於ける存在は、假托妄分別の幻影であり、戲論なりとし、圓成實相上に浮動する幻影を拂拭して中道眞相を開顯せんとする解脫論である。「不」と「無」との否定詞の譯語の相違は、「中論無畏疏」を著はす全體的要旨と、造論の意志とに大なる相異を來たし、「觀因緣品」に於て取扱へる十二因緣の表裏、順逆兩觀の相異に由るものである。藏譯「中論無畏疏」に於ては、八不說は「無畏疏」全文に通じて文義不相應なるにより、八無中道として譯出されてゐる、これ本論の題號は既に「根本中(論)無畏疏」とあるに照應すべきであらう。

羅什譯は「觀因緣品」に於て、「八不」の譯語を以て譯出してゐれども、彼はその他の諸品に於て、同一梵偈を或は「不」字に、或は「無」字に譯出し、譯語の統一を缺いてゐる。是れに依て觀るも接頭否定詞 a と an とは何れも同義にして、「不・無・非」の三樣態に譯出せらるべき字義を有することは、羅什自身に於ても許してゐる。同一偈品も譯者の見解に從つて譯語にも種々相違して一定してゐない用例は無數に散見す。

「中　論」(鳩摩羅什譯)　「般若燈論」(清辯造、波羅頗密多羅譯)　「大乘中觀論」(安慧造、惟淨譯)

「觀涅槃品」　「觀涅槃品」　「觀涅槃品」

(一)「若一切法空　○○○○○　(一)「若一切法空
無生無滅者　○○○○○　無生亦無滅
何斷何所滅　○○○○○　無斷無所證
而稱爲涅槃」。　○○○○○　云何成涅槃」。

(二)「無得亦無至　(二)「無退亦無得
不斷亦不常　非斷亦非常　不斷亦不常
不生亦不滅　不生亦不滅　不滅亦不生
是說名涅槃」。　說此爲涅槃」。　此說爲涅槃」。

(一)「若し此の一切が空ならば　//Yady çūnyatam idaṁ sarvam
生は無く、滅も無し　udayo na-asti na-vyayaḥ/
又何の斷と滅との故に　prahāṇād vā nirodhād vā
涅槃が說かるゝや」。　kasya nirvāṇam iṣyate//

「若し是等の全てが空ならば　//Gar-te ḥDi-dag Kun-Stoṅ-na/
生は無く、滅も無し、　/ḥByuṅ-ba Med-Ciṅ ḥJig-pa-Med/
何の乗と滅との故に　/Gaṅ-Shig Spaṅ daṅ ḥGag-pa-Las/
涅槃すべしと云ふや」。　/Mya-Ṅan-ḥDas-Bar ḥGyur-bar ḥDod//

(二)「乗てられることなく、得られるなく、//A-prahīṇam a-saṁprāptam
斷なく、常なく、　an-ucchinnam a-çāçvataṁ/
滅なく、生なし、　a-niruddham an-utpannam
是れを涅槃と云ふ」。　etan nirvāṇam ucyate//

「乗なく、得なく、　/Spaṅ-ba-Med-pa Thob-Med-pa/
斷なく、常なく、　/Chad-pa-Med-pa Rtag-Med-pa/
滅なく、生なし、　/ḥGags-pa-Med-pa Skye-Med-pa/
是れを涅槃と云ふ」。　/De-ni Mya-Ṅan-ḥDas-par ḥDod//

梵語接頭詞の否定字a＝an＝na（不・非・無）を藏譯するに就て、若し「不」の字義に譯出することを必要とする場合に於ては、梵語aの否定詞に相應せしむるにma（不）の接頭詞を以て名詞、動詞の各頭に冠してその對譯とし、若し「無」の字義を必要とするときは、梵語na（無）に相應せしむべくned（無）の接尾詞を以て各語の後に添接するを語法とする。左の用例は是を證明するであらう。

「觀四諦品」

(三)「若有決定性　世間種々相　則不生不滅　常住而不壞」

「自性に於て世間は、種々の狀態を離れ不生、不滅にして又不變なるべし」

//Ajātaiṁ aniroddhaiṁ ca kūtasthaiṁ ca bhaviṣyate/ vicitrābhir avasthābhiḥ svabhāne rahitaiṁ jagat//

「自性存せば、諸有情は種々の狀態を離るべく、不生と不滅と、又不變とに住すべし」。

//①No-Bo Yod-na ḥGro-ba-Rnams/ /gNas-Skabs Sna-Tshogs ḥThal-ḥGyur-Shin/ /Ma-Skye-pa daṁ Ma-ḥGags-pa Daṁ/ /Ther-Jug-tu Yaṁ gNas-par-ḥGyur//

① 原本藏文 dÑos-po-Ñid（存在性）とあれど、梵偈 Svabhāva に依て Ño-bo（自性）と改訂せり。

この藏文 Ma-Skye-pa（不生）と Ma-ḥGags-pa（不滅）とは、梵偈 a＋jātaṁ　a＋niroddhaṁ を直譯せるもので、藏文譯者が梵偈の接頭詞 a は「不」の字義に譯出すべきものなりと認めたるとき、藏語に於ても、常に接頭詞 ma（不）を語頭に冠して否定の字義を詿はすことゝし、若し「無」の字義ならば ma（無）の否定詞を接尾語後に添接して虛無の義を詿はすことゝした。玄奘譯の「般若心經」に於て、接頭詞の a と、副詞の na とは何れも「不」、「無」の兩樣に譯出して一定してゐない、幷し大體に於ては梵語接頭否定詞 a は藏語 Ma（不）に譯され、時には例外あれども、梵語副詞 na は藏語 Med-pa（無）に譯出されてゐる。今梵藏「般若心經」に於ける「不」・「無」の異同字義の對照を左に示す。

（梵）　A＋utpannā　　a＋niruddhā　　a＋malā
　　不　生　　不　滅　　不垢

（藏）　ma-Skye-pa　　ma-ḥGags-pa　　Dri-ma-Med-pa
　　不　生　　不　滅　　垢　無シ

（梵）　na＋vimalā　　nonā　　na＋paripūrṇāḥ
　　不　淨　　不減　　不　增

（藏）　Dri-ma daṅ-Bral-ba　　Gaṅ-ba Med-pa　　Bri-ma Med-pa
　　垢　ヲ除ク　　垢　無シ　　減　無シ

（梵）　na＋rūpaṁ　　na＋vedanā　　na＋saṁjñā　　na＋saṁskāra
　　無　色　　無　受　　無　想　　無　行

(藏) gZugs-Med　Tshor-ba-Med　ḥDu-Çes-Med　ḥDu-Byed-Med
色　無シ　受　無シ　想　無シ　行　無シ

(梵) na-vijñāna……na＋a＋vidyā　na＋a＋vidyā＋kṣayo
無　識　無　無　明　無　無　明　盡

(藏) Rnam-par-çes-pa-Med……Ma-Rig-pa-Med　Ma＋Rig-pa-Zad-pa-Med-pa
識　無シ　不　明　無シ　不　明　盡　無シ

以上の理由と種々の用例とに依て觀れば、羅什譯の「中論」と、藏譯の「中論無畏疏」との相異は、「觀因緣」の根本義の闡明に於て現象論否定と、中道實相論開現との相異を示すことゝなるであらう。藏譯の論理明晰、その註解も極めて簡潔古雅、靑目釋の比すべきではない。

本論和譯に就て梵文本偈はプーサン氏著の Mūla-Madhyamaka-kārikās, De Nāgārjuna, avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti. (Louis de la Vallee Poussin. St-Pe'tersbourg, 1903) に據り、傍らフンザー氏の獨譯 Die Mittler Lehre des Nāgārjuna; Wallesser. 1911. を參照した。

この梵文本偈を譯出するに泉教授の教示を仰ぐところ多し、茲に謹んで謝意を表す。

昭和七年四月十七日

龍樹造・中論無畏疏

寺本婉雅譯

梵語、　/Mūla madhya-mikā vṛiti akuto bhayā/

藏語、　/dBu-Ma Rtsa-Baḥi ḥGrel-Pa Ga-Las ḥJigs-Med/

國語、　根本中(論)無畏疏

第一品

三寶に敬禮す、

文殊師利に敬禮す、

阿闍梨耶龍樹(Nāgārjuna, Klu-Sgrub)に敬禮す。(此句は後人の附記)

彼(牟尼)は生と畏等とを此理趣を以て能斷するに、緣起論を說き結ひし彼牟尼王に敬禮す。

彼に由て緣起論は、　//Gaṅ-Gis Rten-Giṅ ḥBrel-Med-Pa/

滅なく、生なく　/ḥGag-Pa Med-Pa Skye-Med-Pa/

「斷なく、常なく、
來なく、去なく、
異義に非ず、一義に非ず、
戲論を寂滅し、寂靜を說き給へる、
正等覺者、諸說(中)の
かの最上者に敬禮す」。

/Chad-Pa Med-Pa Rtag-Med-Pa/
/Ḥoṅ-Ba Med-Pa ḥGro-Med-Pa/
/Tha-Dad Doṇ-Min Don-gCig-Min/
/Spros-Pa Ñe-Shi Shi-bStan-Pa/

「不生亦不滅、 滅なく、生なく、
不常亦不斷、 斷なく、常なく、
不一亦不異、 一義ならず、異義ならず、
不來亦不出、 來なく、去なく、
能說是因緣、 安穩に戲論を寂滅せしむる、
義滅諸戲論、 緣起を說き給へる正覺者、
我稽首禮佛 諸說中、最勝なる
諸說中第一。」 その人に我は敬禮す。

/Rdsogs-Paḥi Sans-Rgyas Smra-Rnams-Gyi/
/Dam-Pa-De-Ḷa Phyag-ḥTshal-Ḷo/
/A-nirodham an-utpādam (P.11).
an-ucchedam a-çāçvataṁ/
an-ekārtham a-nānārtham
an-āgamam a-nirgamaṁ/
yaḥ pratītya-samutpādaṁ
prapañca-upaçamaṁ çivaṁ/
deçayāmāsa saṁbuddhas
taṁ vande vadatāṁ varaṁ//

/ Der den pratītya-samutpāda, ohne Vergehen, ohne Entstehen, nicht abgeschnitten, nicht ewig,

ohne Kommen, ohne Gehen, ohne Einheit, ohne Vielheit, die glückselige Beruhigung der Entfaltung (Prapañca), gelehrt hat, ihn, den vollendeten Buddha, den besten der Redner, verehre ich / (Wallesser.P.I)

彼に依て教化せらるゝ衆生は、①自在天と、②神我と、③兩者と、④時と、⑤自性と、⑥決定と、⑦自存と、⑧變化と、⑨極微との因に由て邪(見)に墮し、⑩無因と、⑪因不相應と、⑫斷と、⑬常見とに耽着し、法身を見るを隱蔽し、かの我見と、彼とに耽着し、彼と彼等の無因と、不相應と斷と常との顚倒見の故に、法身を證悟せしめんが爲め、かの我見と、かの顚倒(見)の故に、多くのものをして悉く淸淨ならしめ、廣大慧を有する甚深なる教器たらしめんが爲めなり。

① 自在天　Maheçvaradeva, dBan-Phyug; 濕婆。
② 神我　Puruṣa, Skyes-Bu; 漢譯の世性。教論の神我。
③ 兩者　Ubhaya, gÑi-Ga; 漢譯の和合。
④ 時　Kāla, Dus; 漢譯の時論師。
⑤ 自性　Prakṛiti, Raṅ-bShin; 漢譯世性。教論自性。
⑥ 決定　Niyata, Ñes-Pa; 運命論。
⑦ 自存　Svabhāva, Ño-Bo-Ñid; 漢譯自然。
⑧ 變化　Vikāra, ḥGyur; 漢譯の變生。

⑨ 極微　Aṇuḥ, Rdul-Phran; 漢譯の微塵。
⑩ 無因　A-hetu, Rgyu-Med.
⑪ 因不相應　Viçama-hetu, Rgyu Mi-mThun-Pa.
⑫ 斷　Ucchedam, Chad-Pa.
⑬ 常見　Çaçvatam-dṛiṣṭiḥ, Rtag-Par Lta-Ba.
⑭ 我見　Ātma-dṛiṣṭiḥ bDag-Tu-Lta-Ba.

先きに說ける緣①起論とは、②滅なく、③生なく、④斷なく、⑤常なく、⑥來なく、⑦去なく、⑧異義に非ず、⑨一義に非ず、⑩戲論を除滅し、寂靜を敎ゆる正等覺者、諸說(中)の、かの正(法)に敬禮す。

と言へる(意)なり。如來の稱讃を宣說、敬禮すと云へる此の施設によりて⑪眞諦を全て敎示するなり。

① 緣起論　Pratītya-samutpāda, Rten-Ciṅ ḥBrel-Par ḥByuṅ-Pa.
② 滅なく　Aniroḍham, ḥGag-Pa Med-Pa; 漢譯不滅。
③ 生なく　Anutpādam, Skye Med-Pa; 漢譯不生。
④ 斷なく　Anucchedam, Chad-Pa Med-Pa; 漢譯不斷。
⑤ 常なく　Açāçvatam, Rtag Med-Pa; 漢譯不常。
⑥ 來なく　Anāgamam, Ḥoṅ-Pa Med-Pa; 漢譯不來。
⑦ 去なく　Anirgamam, ḥGro-Med-Pa; 漢譯不去。

⑧異義に非ず　A-nānā-artham, Tha-Dad Don-Min；漢譯不異、梵譯不異義。
⑨一義に非ず　An-eka-artham, Don-gCig-Min；漢譯不一、梵譯不一義。
⑩戲論　Prapañca, Spros-Pa. 化影の義。
⑪眞諦　Paramārtha-satya, Don-Dam-Paḥi bDen-Pa.

（一）そこに滅なしと言ふは、緣起(論)中にては滅あることなし、何故となれば、生なければなり。
（二）生なしと言ふは、滅なければなり。
（三）斷なしと言ふは、種子(Vīja, Sa-Bon)と、芽(Pravāla, Myu-Gu)とに於けるが如し。
（四）常なしと言ふは、種子と芽との間の存在(Bhāva, dNos-Bo；物の義)の如し。
（五）來なし、去なしと言ふは、虛空(Ākaça, Nam-mkhaḥ)の如く(意識すべき何物もなし)となり。
（六）異義に非ずと言ふは、穀物(Sāli, Sa-Lu)の粒に於けるが如し(Wallesser 氏の ohne Vielheit は誤譯)。
（七）一義に非ずと言ふは、穀物の種子に(於けるが)如し。(Wallesser 氏の ohne Einheit は誤譯)。

餘の諸說に於ても亦是の如く、何等かの品類に語を纏めて說明せざるべからず。

此に(問て)言く、何にが故に彼等の八(種)を(以て)否定せしむるや。此に釋して曰、緣起(論)は(P. 35a)、この言說の眞理を敎示するが故なり。勝義諦に入るとは、かの滅等の八種語の執着を退

けんが爲めに、滅なし等の八(種)語を說きしなり。

此に(問て)言く、然らば何が故に「滅なし」の語を先きに說きしぞ。此に釋して曰、是の如く且らく「生」の語を先きに說明して決定せしかなれど、されど尙偈文に纏むべき力に依て、「滅なし」と云ふ語を先きに置きしことは矛盾せず。又「滅」と云ふ名は、存在(dNos-Po; 物)に於て能く耽着するが故に、かの耽着を離れしめんが爲めなり。世尊は(八千)般若經(Aṣṭasāhasrikā-Prājñāpāramitā, Ḉes-Rab-Kyi Pha-Rol-Tu Phyin-Pa)中に(說きて曰)、

「須菩提(Subhūti, Rab-ḥByor; 漢譯 善現)よ、こは云何に思惟するや、總て心を滅せば、そは再び生じ得るや。答て言く、世尊よ、そは(生せ)ざるなり。(世尊)曰。須菩提よ、こは云何に思惟するや。總て心を生起(Skyed-Pa)せば、そは滅法を有するや。答て言く、世尊よ、滅法を有せざるなり。曰、須菩提よ、こは云何に思惟するや。總て滅法は、そは滅し得るや。答て言、世尊よ、そは(滅せ)ざるなり。曰、須菩提よ、こは云何に思惟するや。總て不生(Ma-Skye-Pa)は、そは滅法を有するや。答て言、世尊よ、そは(有せ)ざるなり。曰、須菩提よ、こは云何に思惟するや總て滅法は、そは生じ得るや。答て言、世尊よ、そは(生せ)ざるなり。曰、須菩提よ、こは云何に思惟するや(P. 35b)。總て心の滅法は、そは滅し得るや。答て言、世尊よ、そは(滅せ)ざるなり。曰、須菩提よ、こは云何に思惟するや。法は自性①に由て自存②なし、かの總ての滅(法)は滅し

得るや、答て言、世尊よ、そは(滅せ)ざるなり」と、斯く說き給へり。

①自　性　Prakṛiti, Rań-bŠhin；漢譯世性、數論自性。
②自　存　Svabhāva, Ňo-Bo-Ňid；漢譯自然、又自性。
③「般若經」　順中論(龍勝造)の飜譯之記には曰、
「龍勝菩薩通法之師、依二大般若一而造二中論衆典一。」

是の如く、何が故ぞなれば、(八千)般若經中に、「滅法を有するものは滅すべし」と次第に言說を假托せり、この故に「滅なし」と云へる語句を先きに說きしなり。

又「滅なし」と云へる語の意義より「斷なし」と云へる語に至るまで、「斷」に關係して現はるが故に、「滅なし」と云ふ語句を先きに說きし(所以)なり。

何が故ぞ、「斷なければ、滅なし」と(云ふ)や。こは總て斷ぜられうるものは、そは滅せらるべしと斯く見るべからず、この故に「滅なし」となり。

何故ぞなれば、「生なし」と云へる語の意義より「常なし」と云へる語に至るまで、斷(と云へる語)に關係して現起するが故に、「滅なし」と云ふの語尾に固執する(に至る)、故に「生なし」と說きしなり。

何故ぞ「滅なければ斷なき」や。こは總て滅せられうるものは、そは斷ぜらるべしと、斯く見るべからず。是の故に「斷なし」となり。

何故ぞ「生なければ、常なき」や。こは總て生じ得るものは、そは常なるべしと、斯く見るべからず。是の故に「常なし」となり。

(一) 今は別に於て觀察すべし。「滅なし」とは、已滅(hGags-Pa)と、未滅(Ma-hGags-Pa)との中には、現滅(hGag-Pa)は認むべからざればなり。「生なし」とは移轉(hPho-Ba; 死)なきを認むべからざればなり(P. 36a)。

そは昔の別の解釋によれば、「滅なし」とは、それ(不滅)より別の住位中に滅は認むべからずと。

(二) 又別の觀察によれば、「滅なし」とは、色と名(Lus-Dań Miń)とは認むべからざればなり、生なきが故に、又色と名とは認むべからざるなりと。

(三) 又別の解釋によれば、「滅なし」とは、自存(Suvabhāva, Ńo-Bo-Ńid 又自性)の存在を認むべからざればなり。「生なし」とは、自存の存在は認むべからざればなりと。

(四) 又別の觀察によれば、「滅なし」とは、自存は空(Çūnyata, Stoń-Ba)なればなり。「生なし」とは、自存はまた空性(Çūnyatā, Stoń-Ba-Ńid)なればなりと。

(五) 又別の解釋によれば、「斷なし」とは滅なければなり、「常なし」とは、生なければなりと。

「異義に非ず」とは、生なければなり、「一義に非ず」とは、滅なければなりと。「來なし」とは、生なければなり、「去なし」とは、滅なければなりと。

(六) 又別の觀察によれば、「生と滅となき」が故に、その餘の一切に於ても、是の如く耽着なしとなり。

(七) 又別の觀察にては、(a)「何に能依し」(Yat-Pratitya, Gaṅ-La bRten-Nas)。(b)「何を緣起(發生)するや」(Yad-utpādam, Gaṅ-ḥByuṅ-Ba)。(c)「そは何の故にや」(De-Ni Gaṅ-Gi-Phyir)と。又其者(自存、No-Bo-Ñid)にも非ざるが故に、亦別のものにも非ず、この故に三種に由るが故に、又その中には生は認むべからず、この故に「生なし」(Skye-Ba-Med)、生なきが故に來もなし。來もなきが故に(現)去もなしと。

(八) 又別の解釋にては、(a)「何に能依し」(Gaṅ-La bRten-Nas)。(b)「何を生じ」(Gaṅ-ḥByuṅ-Ba)、(c)「そは何の故にや」(De-Ni Gaṅ-Gi Phyir)と。其者(自存 No-Bo-Ñid)にも非ず。この故に「常なし」と。何故ぞなれば、別のものにも非ず、この故に「斷なし」となり。

(九) こは(又)別の觀察によれば、(a)「何に能依し」、(b)「何を生じ」、(c)「何の故にや」と。其者(自存)にも非ず、この故に「一義にも非ず」。何故となれば、別のものにも非ず、この故に「異義にも非ず」となり。

(十) こは別の解釋なり、(a)「何に能依し」、(b)「何を生ずるや」。そは自存(自性)(Ṅo-bo-Ṅid)なし。自存なきが故に「生なし」、生なきが故に「一義にも非ず」、「異義にも非ず」。唯生なきが故に、來もなく、(現)去もなきなりと。

(十一) こは別の解釋なり、(a)「何に能依し」、(b)「何を生ずるや」。そは自存(Ṅo-Bo-Ṅid)なし、自存なきが故に、滅等の名の一切差別的自存を能く耽着せざるなりと。

(十二) こは別の解釋なり。そこに前の四句の「滅なし」等に於て、「常なし」等の究竟は、大概自己(龍樹)の宗義の中樞に屬するが故に、それ等は精釋し了れり。かのあらゆる外道は餘の宗義に關係するが故に、其等を精釋すべし。

數論派(Saṅkhya, Grans-Can)は、因(Hetu, Rgyu)と、果(Phala, ḥBras-Bu)とは同一(gCig-pa)なりと言ひて、一切を成ずるが故に、其を退けんが爲めに、「一義に非ず」と云へるなり。

勝論派(Vaiçesika, Bye-Brag-Pa)は、因と果とは異なりと言ひて、一切を成ずるが故に、其を退けんが爲めに、「異義に非ず」と(云へる)なり。

是等の二者は、また諸の存在(Bhāvānām, dṄos-po. Rnams; 有)中に於て、種々の異作用(Bya-Ba Rnam-Pa Tha-Dad-Pa)ありと能く執着するが故に、其等の「去」(ḥGro-Ba)を集め、其等を退けん

が爲めに、「來なく」、「去なき」を敎示せり。

茲に問て言く、意義（Artha, Don）なければ、滅等の名の差別も發生（hByuṅ-ba）せざるが故に（Nird-hādi-nāma-viçeṣa-asambhavāt）、この故に總て意義あらば、滅等の名の差別は（P. 37a）發生すと思惟す（るにより）、諸の存在（物）は存するなり。

此に釋して曰、名（Nāma, Min; die Bezeichungen, 形式）と、有名（Abhidheya, Min-Can; Bezeichnetes, 內容）とを能く成立せば、滅等の名の差別を亦能く成立すべしと計量するとも、其等は認むべからず。云何と云ふに、これ「名」と「有名」とは同一なるか、はた異なるかを成立せしむと計量するも、二者の如きは亦認むべからず、何故と云ふに、若し且く總ての「名」其者は卽ち「有名」なりと、かく見れば「有名」は同一となるべし。斯く同一なりとせば、「名」と云ふとき單なる言葉のみとなるも、理としては言葉の上に於ては（二者は同一と）ならざるなり。

復此に諸の聲論師卽ち文法家（Çabda-kṣala, Çābdika, Sgra-La Mkhas-Pa）あり、言く。作者（Byed-Pa-Po, kāraka）と、業（Las, Karma 作）とは、分別の故に一切を成立す、この故に二者は同一に非ずと。何れにしても「名」もまた別なれば、「有名」もまた別なるべし、斯くては差異となるべし、この二者は無因となるが故に、そは謂ふべからず。又「有名」の名を認めば、「無名」の名も（認め）得べし。又「無名」に於ては「有名」と云ふことも認むべからず。總てに由てそこに名を假托せられたり。

この故にかの二者はまた異に非ず。斯く何の故ぞなれば、かの「名」と、「有名」との二者は同一なるか、異なるかを成立することは認むべからず、この故に滅等の諸の差別は成立せざるなり。

又聖教量（Āgama-Pramāṇa, Luṅ-Gi Tshad-Ma）に據るに、

「經に曰く、名とは迷妄因（Maricikā, Smig-Rgyu）に似たり。若し迷妄因に似たらば、そは顚倒（Viparita, Vitatha, Phyin-Ci-Log）なり。若し顚倒ならば、そは如實にあらず。若し不如實の名を能く觀察せば、かの分別は如實なりと云ふは正しからず」。

と說き給へり。この故に聖教量に據るも、又かの「名」と、「有名」との二者は成立せず。かの二者の成立せずば、滅等の「名」に於ける觀察は成立せず。

（一）是の故に又滅は認むべからず、何故に言ふとならば、世間に現に見るが故なり。かく世間に於て諸の存在（dNos-Po）は「滅なし」と云へるを見るなり。初劫の穀物等の總ての分別に於て、若し其等の滅は滅し得れば、今の時に於て穀物等は現はれざるべし。されど（そは）現はるなり、この故に「滅なし」となり。

（二）此に問て言く、然らば生（Utpāda, Skye-Ba）は存在すべきなり。此に釋して曰、「生はなし」（Anutpādam, Skye-Ba-Med）と。何が故にとならば、世間に見るが故なり。是の如く、世間に於て諸の存在は「生はなし」と云へるを見るなり。斯くて初劫に於ける總ての穀物等も、それ等の（生）

なくば、今の穀物等は決してなし。若其等なくして今の時の穀物現はれ得べくば、「生あり」と云へることは合理なるも、(そは)現はれざるが故に、この故に「生なし」となり。

(三) 此に問て言く、「斷は存すなり」(Ucceda-asti, Chad-Pa-Yod)。此に釋して曰、「斷はなし」(an-ucchedam, Chad-Pa-Med)と何故と云ふとならば、世間に於て見るが故なり。是の如く世間に於て諸の存在(漢譯　萬物)は「斷なし」と云へるを見る。穀物の種子より穀物の芽等の發生するを見るが(如し)。若し斷あらば、發生其者は緣すべからず、されど發生を緣せらるゝが故に(P. 38a)、この故に斷はなきなり。

(四) 此に問て言く、「常は存す」と。此に釋して曰、「常はなし」(açaçvatam, Rtag-Pa-Med)と。何故に云ふとならば、世間に於て見るが故なり。是の如く、世間に於て諸の存在は「常なり」と認むべからずと云へるを見る。穀物の種子は芽の時に意識(緣)すべからず、何故とならば、是の如く、芽の時に種子は緣すべからざればなり、この故に「常はなし」となり。かの穀物の種子に於ける如く、一切の存在もまた思惟せらるべきなり。

(五) 此に問て言く、若し斯くては、是れが爲めに諸の存在は「一義」(Eka-artham, Don-gCig-Pa)となるべし。此に釋して曰、「一義に非ず」(An-eka-artham, Don-gCig-Pa-Ma-Yin)と。何故に云ふとならば、世間に於て見るが故なり。是の如く世間に於て諸の存在は「一義に非ず」と云へるを見る、

これ穀物の種子は芽に非ず、若し一義ならば、種子と芽とは差異ありと稱すべからず、されど其等は差異ありと稱するが故に、この故に「一義に非ず」となり。

（六）此に問て言く、若し「一義なり」と云ふべからずは、是に由て諸存在は「異義」（Nānā-artham, Don Tha-Dad-Pa）となるべし。此に釋して曰、「異義に非ず」（Anānārtham, Tha-Dad-Pa Ma-Yin）と。何故に云ふとならば、世間に於て見るが故なり。是の如く、世間に於て、諸の存在は「異義に非ず」と云へるを見る。此に穀物の種子と、穀物の芽と、穀物の葉と云へるなどを見る。若しそれを異義なりと云はゞ、穀物の種子と、穀物の芽と、穀物の葉のみと、確かに斯く言ふべし。コダーラ（kodāla, 芥子）の種子と、芥子の芽と、芥子の葉と云へるに、又何が故に斯く言はざるや。何が故に是の如く成らざるや、この故に「異義に非ず」となり。

（七）此に問て言く、「來は存す」と。此に釋して曰、「來はなし」（An-āgamam, Ḥoi-Ba-Med）と。何が故に云ふとならば、世間に於て見るが故なり。是の如く、世間に於て、かの諸存在は何處よりも亦「來ることなし」と云へるを見る。こは穀物の芽が或方向より來りて穀物の種子中に決して住せざるが（如し）。若し芽が他境の方向より來りて種子中に必ず住すべくば、森林中に鳥が栖みながら出づるが如し、されど斯く現はれざるが爲に、この故に「來はなし」となり。

（八）此に問て言く。「去は存す」と。此に釋して曰。「去はなし」（A-nirgamam, ḥGro-Ba-Med）と。

そは何故に云ふとなれば、世間に於て、見るが故なりと。是の如く、世間に於て、かの諸存在は「去なし」と云へるを見る。これ穀物の芽は種子より「去なき」を見るなり。若し去の存し得べくは、山(穴)中より蛇の(生)現はるが如くなるべし、されど(生)現はれざるなり、是の故に「去はなし」となり。是の如く定む。これに由て滅等は認むべからず、是れ第一の觀察なり。

「觀因緣品」第一 (Pratyaya-parīkṣā-nāma-prathamaṁ-prakaraṇaṁ)

此に問て言く、然らば他に於て云何ぞ「生なきや」、此に釋して曰、

(1)「自よりにも非ず、他よりにも非ず、　//bDag-Las Ma-Yin gShan-Las Min/
二者よりにも非ず、無因よりにも非ず、　/gÑis-Las Ma-Yin Rgyu-Med Min/
なべての存在は　又何處にても、　/dÑos-Po Gaṁ-Dag Gaṁ-Na Yaṁ/
恐らくば生は有るに非ず」。　Skye-Ba Naṁ-Yaṁ Yod-Ma-Yin// (P.38b)

「諸法不二自生一、　「自よりもなし、他よりもなし」　/na svato nā'pi parato na
亦不二從一他生一、　二(自他)よりも、無因よりもなし、　dvābhyaṁ nā' py ahetutaḥ/
不一共不二無因一、　諸の存在は何處にても、如何なるものにても、　utpannā-jātu vidyante

是故知二無生一」　恐らくは生じて有るなし」。　bhāvāḥ kvacana ke cana// (P.12).

/ Nicht von selbst, nicht von anderem, nicht aus beidem, nicht grundlos, Entstanden sind irgendwelche Dinge irgendwo (und) irgendwann. / (P.9).

「自よりに非ず」と云ふは、自(Svatā, bDag-Ñid)より(生ずるに)非ずとなり。「他よりに非ず」と云ふは、他の自 (Parata Svatā, gShan-Gyi dDag-Ñid) より(生ずるに)非ずとなり。「二者よりに非ず」(dvabhyaṁ)と云ふは、自と他とより(生ずる)に非ずとなり。無因と云ふは、無因(A-hetu, Rgyu-Med-Pa)より(生ずる)に非ずとなり。存在(bhāvā, gÑos-Po; 漢譯 萬物)と云ふは、諸法(と云ふ意)にして、存在と云へる語は、これ一切外道と共通なりと云へるものに比較せるなり。「なぜて」(Gaṁ-Dag)と云ふは、總ての存在と(云ふ意)なり。又「何處に於ても」と云ふは、又云何なる時と、云何なる境に於ても と云ふ(意)なり。生 (Utpādam, Skye-Ba) と云ふは、已生 (jāta, Skyes-Ba) と未生(Ajāta, hByuṁ-Pa)と、現成 (Abhi-siddhi, mÑon-Par Grub-Pa) となり。「恐らくは」と云へる語は、又或時と云へる意義なり。「有るに非ず」(Yod Ma-Yin) と云ふは、有ることなしとなり。何故とならば、是等の四種の次第に由ては、諸存在の生ずるを認むべからず、この故に「滅なし」等の不相應の部分を除滅せしむる諸語を說けるなり。

此に問て言く、汝の四種次第は、總べてのものに由て諸の存在は生ずるなしと分別せらるゝや、そは何の理由に由て、云何ぞ認むべからざるを知るや。此に釋して曰、

(2)「諸の存在の自存(自性)は、　//dNos-Po Rnams-gyi Rań-bShin-Ni/

緣等の中に有らず、　/Rkyen-La Sogs-La Yod-Ma-Yin/

自の存在も有らざれば、　/bDag-Gi dNos-Po Yod-Min-Na/

他の存在も有らず」。　gShan-Gyi dNos-Po Yod-Ma-Yin// (P.39a)

「如諸法自性　實に諸の存在の自性は、　②/Na hi svabhāvo bhāvanāin

不在於緣中、　緣中に見出さゞるなり、　pratyayā ḍiṣu vidyate/

以無自性故、　自性の見出さゝるが故に、　avidyamāne svabhāve

他性亦復無」。　他性も見出さず。　prabhāvo na vidyate// (P.78)

/ Der Dinge Eigensein befindet sich nicht in den Bedingungen usw.;

Wenn Eigenscin sich nicht vorfindet, (So) ist nicht Anderssein / (P.10).

① 自存　Svabhāva, Rań-bShin; 漢譯自性。

② 月稱論師の梵文註釋にては、此(二)偈は同註釋P.78.にありて、次の(三)偈は同註釋P.76.にあり、この兩偈は前後の順序を顚倒してゐる。

「諸の存在の」と云ふは、「諸法の」と云ふ(意)なり。「自存は」と云ふは、「自の存在の自存」にして、自(bDag-Ñid)の存在と云へる約語なり。「縁等の中に」と云ふは、「因等の中に」と云へる約語なり。「等の中に」と云へる語の説明は、他の諸外道が教示せる「一切の縁」を攝在せしむるが故なり。「有らず」と云ふは、「因の説明」は先きに與へたり。「有らず」と云ふは、阻止の義なり。「自の存在」と云ふは、「自性の存在」と云へる約語なり。「有らざれば」と云ふは、「有るに非ざれば」と云へる義なり。「他の存在も」と云ふは、他の自性(Ño-Bo-Ñid)は、他の存在と(云ふ義)にして、自性の存在に非ずと云へる約語なり。「有らず」と云ふは、「有るに非ず」と云へる義なり。何故とならば、諸の存在の自存(漢譯自性)は諸縁等中に存せず、この故に諸の存在は自より生ずるを認むべからず。何故とならば、「自の存在も有らざれば、他の存在も有らず」、この故に諸の存在は他より生ずるを認むべからず。自の存在と、他の存在も有らざれば、諸の存在は二者中に生ずるを認むべからず。無因は眞に最終なるが故に、それより尙諸の存在の生ずるを認むべからず。

此に阿毘曇(Abhidharma,Chos-mÑon-Pa)の人々は言へり。

(3)「諸縁は四なり、因と、 //Rkyen-Rnams bShi-Ste Rgyu Dań-Ni/

所縁と、次第縁、 /dMigs-Pa Dań-Ni De-Ma-Thag/

增上とは是の如し、

第五緣は存せざるなり」。

「因緣、次第緣、四の緣とは、因と緣々、增上緣、所緣と、次第と、四緣、生諸法、是の如くに增上となり、更無第五緣、」而して第五の緣は存せず。

/bDag-Po Daṅ-Ni De-bShin-Te/

/Rkyen-Lṅa-Pa-Ni Yod-Ma-Yin// (P.39b)

/Catvāraḥ pratyayā hetuç-ca

ālambanam anantaraṁ /

tathaiva adhipateyaṁ ca

pratyayo na-asti pañcamaḥ// (P.76).

/ Bedingungen (pratyaya) sind vier: Grund (hetu), Abhängigkeit (ālambana), Reihenfolge (anantara),

Beherrschende (adhipateya) auch so: eine fünfte Bedingung existiert nicht / (P.10).

諸品を造ることに由て、この註釋と、是等(四緣)とに由る說明は、云何程の緣を說明すとも、其等一切(說明)は、この四緣に攝せらるゝが故に、第五緣は有らざるなり。「總て四緣に攝せらる」と云ふとき、「因の緣」(Rgyuḥi-Rkyen) とは、發起(bSkyed-pa)の義に由るとなり (P.40a)。「所緣の緣」(dMigs-Paḥi Rkyen)とは、依止(Rten)の意義に由るとなり。「次第緣」(De-Ma-Thag-Paḥi Rkyen; 等無間緣とは、中間を斷ぜざるに由るとなり。「增上緣」(bDag-Paḥi Rkyen)とは、支配せしむる義に由るとなり。是等の四緣に由て諸の存在の生と、發生(緣起)と、因との註釋の語を說明するなり。

此に釋して曰、

(4)「作用は緣を有するに非ず、 //Bya-Ba Rkyen Daṅ-Tdan-Ma-Yin/

緣を有せざる作用もなし、 /Rkyen Daṅ Mi-Ldan Bya-Ba-Med/

作用を有せざる緣もなし、 /Bya-Ba Mi-Ldan Rkyen Ma-Yin/

作用を有する緣もなし」。 /Bya-Ba-Ldan ①Rkyen Yod-Ma-Yin/ (P.40a)

「果爲從緣生、 作②用は緣を有せず、 /Kriyā na pratyayavatī (P.79)

爲從非緣生、 緣を有せざる作用もなし、 na-apratyayavatī kriyā/

是緣爲有果、 作用を有せざる緣もなし、 pratyayā na-akriyāvantaḥ (P.80)

是緣爲無果」。 作用を有する彼(緣)もなし。 kriyāvantaç ca santyuta (P.81)

/ Das Tun ist nicht mit Bedingungen behafted, nicht mit Bedingungen behaftetes Tun existiert nicht, Nicht mit Tun behaftete Bedingungen existieren nicht, existieren sie denn mit Tun behaftet? / (P.11).

① 原文 Yod Ḥon-Te-Na は Rkyen Yod-Ma-Yin の誤寫であらう。

② 梵語 kriyā(作用)を羅什は果と譯せり。

汝は四緣(Rkyen-bShi-Po)を以て諸の存在の所作を説明すれど、そは緣(Pratyaya)を有するや否。緣を有せざるものなりと計量するとも、そは有するか、若は(有せざるもの)なるかの二者中に於て又諸緣を要することなきが故に有せざるなり。諸緣も亦作用を有することありと計量すとも、それ等は亦有するか、若しは(有せざるもの)なるかの二者中に於て作用なきなり。作用しつゝか、若しは已燒(bSregs-pa)と、未燒(Ma-bSregs-Pa)との如きなれば、そこに四緣等を以て諸の存在の作用を説明すと云へる、彼の總ての説明は合理的ならず。

復曰

(5)「是等に依止して生ずるとき、
是の故に是等を緣と稱す」。

//ḥDi-Dag-La bRten-Skye-Bas-Na/
/De-Phyir ḥDi-Dag Rkyen çes-Grags/ (P.40a)

「因是法生果、
是法名爲緣」。

是等のものに依止して(彼)生ずるとき、
是等のものを緣と稱す。

/Utpadyate pratītya imān iti-ime pratyayaḥ kila/ (P. 81).

/ Weil von diesen abhängig (etwas) entsteht, deshalb heissen diese Bedingungen / (P.111).

是等に依止して諸の存在は生ずるに由る、この故に是等を緣(Pratyaya, Rkyen)なりと稱せらる、是を釋すべきなり。

「生ぜざる限り、その間だ、

云何ぞ是等は非緣に非ざる」。

//Ji-Srid Mi-bSkyed De-Srid-Du/

/ḥDi-Dag RIkyen-Min Ji-Ltar-Min// (P.40a)

「若是果未生、　是等のものゝ生ぜざる限り、

何不名非緣、　その間、如何ぞ非緣ならざる。

/Yavān na-utpadyata ime

tāvan na-apratyayāḥ kathaṁ// (P.81)

/ Wielange sie nicht erzeugen, warum sind sie so'ange nicht Nichtbedingungen? / (P.11).

有る限りに於て存在は發起せず、その間だ、云何ぞ又是等は非緣となるや、(そは)壞と未壞との如きものなり。

復曰、

(6) 若は無、又は有の義中には

緣は適當ならず」。

//Med-Dam Yod-Paḥi Don-La Yaṅ/

/RIkyen-Ni Ruṅ-Ba Ma-Yin-Te/ (P.40a).

「果先於緣中、　無に對しても、有に對しても、

有無俱不可」。　義の緣は妥當ならず。

/Naivāsato naiva sataḥ

pratyayo'rthasya yujyate/ (P.82).

/ Wenn (das Ding) nicht ist, wessen Bedingung wäre sie? / (P.12).

緣の存在は無なるか、若しは有なりと計量するとも、二者に於ては有なるを認むべからず (P.40b)。

未生と、已生との如きものなり。云何ぞ言ふとならば、釋して曰、

「若し無ならば、何の縁となるや、　/Med-Na Gaṅ-Gi Rkyen-Du ḥGyur/

若し有ならば、縁に由て何の作用かある」。　/Yod-Na Rkyen-Gyis Gi-Shig-Bya// (P.40b)

「先無爲誰縁、　無の縁は何の①(用かあらんや)、　asataḥ pratyayaḥ kasya

先有何用縁」。　而して有は縁に由て何にかせん。　sataç ca pratyayena kiṅ// (P.82).

/ Wenn es ist, wozu braucht man eine Bedingung? / (P. 12).

生れながらの盲目(dMus-Loṅ)の如きか、若しは一切智者の如きものなり。

① 梵語 kasya は「何か」「誰か」の兩義あり。

此に問て言く、諸縁は一般に滅を作らるゝとも、其等は各々に依て云何ぞ滅せらるべき。此に釋して曰、

(7)「凡ての時、法は有と、　//Gaṅ-Tshe Chos-Ni Yod-Pa Daṅ/

無と有無とを成すべからず、　/Med Daṅ Yod-Med Mi-ḥGrub-Pa/

云何ぞ能成を因と云ふや、　/Ji-Ltar Sgrub-Byed Rgyu-Shes-Bya/

斯く有らば不合理なり」。　/De-Lta Yin-Na Mi-Rigs-So// (P.40b).

「若果非有生、　有も無も、有無も、　/Na san nā' san na sadasan

亦復非無生、　法は成ぜらるとき、　dharmo nirvartate yadā/

亦非有無生、　如何ぞ成ずる因あらん、　kathaṁ nirvartako hetur

何得言有緣、　實に是の如く有らば理に適せず。　evaṁ sati hi yujyate//(P.83).

/ Wenn nicht ein seiender dharma, nicht ein nichtseiender, nicht ein seiend-und-nicht-seiender herbeigeführt wird, Wie (existiert) ein herbeiführender Grund? Wenn es so ist, ist er nicht angebracht / (P.12)

これ總ての法は因に由て成ぜらるとき、そは若しは有、若しは無、若しは有無かの(何れかの)一を成ずべしと計慮するとも、そは凡ての時、有もまた成ぜず、無もまた成ぜず、有無もまた成ぜず。云何ぞかの成ぜしむるを因と云ふや。斯く有らば(そは)不合理なり。是の如く更に因を滅し了れり

云何ぞ所緣(dMigs-Pa, Ālambanam)を滅すと云ふや。(此に)釋して曰、

(8)「この有の法の所緣は、　//Yod-Paḥi Chos ḥDi dMigs-Pa-Ni/

唯無なりと說かれたり、　/Med-Pa kho-Nar Ñe-Bar bStan/

斯くこの法は無所緣なるとき、　/De-Ltar Chos-ḍDi dMigs-Med-Na/

何處にか所緣あらん」。　/dMigs-Pa Yod-Par Ga-La-hGyur// (P.40b).

「如諸佛所說、　此の有なる法は、　/Anālambana evā yaṁ

眞實微妙法、　無所緣なりと說かれたり。　sandharma upadiçyate/

於此無緣法、　今法は無所緣なるとき、　Athā anālambane dharme

云何有緣緣。」　復何處にか所緣あらん。　kuta ālambanaṁ punaḥ/ (P.84)

/ Dieser existierende dharma wird eben also ohne Abhängigkeit bezeichnet.

Wenn so dieser dharma ohne Abhängigkeit ist, wo wäre die Abhängigkeit existierend? / (P.12)

世尊は(八千)般若經中に說き給へり曰、

「法蘊八萬四千あり、總べての法を說くと雖も、そは一味にして、唯無所緣(dMigs-Pa-Med-Pa kho-Na-Yin)なり」。

斯の如く、法は(すべて)無所緣(意識すべきものなきもの)なりと說き給へり。そは何が故に所緣(ālambanaṁ)ありと說き給ふや。かの所緣は認むべからず、そは虛空の如し。

註　此の藏文偈は次の漢譯偈と前後せり。

云何ぞ次第緣(De-Ma-Thag-Pa, 等無間緣)を滅すと云ふや。釋して曰、

(9)「諸法未だ生ぜざるとき、　//Chos-Rnams Skyes-Pa Ma-Yin-Na/

滅は可能にあらず、　/ḥGag-Pa ṭhad-Par Mi-ḥGyur-Ro/

この故に次第縁は不合理なり、　/De-Phyir De-Ma-Thag Mi-Rigs/

滅法に於て亦縁は何にかせん」。　/ḥGags-Na Rkyen-kyaṅ Gaṅ-Shig-Yin/ (P.40b)

「果若未生時、　諸法の未だ生ぜざるとき、　/Anutpanneṣu dharmeṣu

別不應有滅、　滅は可能に非ず、　nirodho na-upapadyate/

滅法何能縁、　それ故に次第縁は適當ならず、　na-anantaram ato yuktaṅ

故無次第縁。」　而して滅に於て何の縁となるや。　niruddhe pratyayaç ca kaḥ// (P.85)

/ Wenn die dharmas nicht entstanden sind, trifft Vergehen nicht zu / (P. 12).

Deshalb ist die unmittelbare Folge nicht richtig; (und) was ist bei einem Vergangenen Bedingung? / (P.13).

諸法の生を說き給ふに、諸法の未生中には滅は認むべからず (P. 41a)。諸の已生中に(滅を)認めば何すれど次第縁(等無間縁)を云ふべきや、そは不合理なり。已滅中に縁(關係)を說かるゝも、(そは)可能ならず。それなくして縁を敎示せらるゝも、そは何にかせん。かの次第縁は滅し了れり。

云何ぞ增上緣(bDag-Po)を滅すと云ふや。釋して曰、

//dṄos-Po Raṅ-bShin-Med Rnams-Kyi/

(10)「諸の存在は無自性なり、

/Yod-Pa Gaṅ-Phyir Yod-Min-Na/

何故ぞ、有は存在せざるが故に、

/ḥDi-Yod-Pas-Na ḥDi-ḥByuṅ-Shes/

此(事)有るが故に、此(事)を生ずと云ふ、

/Bya-Ba De-Ni ḥThad-Ma-Yin/ (P. 41a)

そは可能ならず」。

/Bhāvānaiṅ niḥsvabhāvānaiṅ

「諸法無自性、　自性を離れたる諸の存在には

na sattā vidyate yataḥ/

故無有相、　有性は存せず、それ故に、

sati-idam asmin bhavatiṭy

說有是事故、　①彼れ有るが故に此れ有りといふ

etam naiva-upapadyate// (P.86)

是事有不然」。　是れは決して可能ならず。

/ Weil bei Dingen ohne Eigensein eine Existenz (sattā) nicht vorhanden ist,

Trifft „Wenn dieses existiert, entsteht (bhavati) jenes“ eben nicht zu / (P.13).

諸の存在(諸法)は無自性なり、何故となれば有と云ふものは存在せず、この故に「是れ有るが故に、是れを生ず」と云ふ、こは可能ならず。この增上緣は滅し(了れ)り。

① 十二因緣起に曰、「此事有るが故に、是事有り」(asmin sati idam bhavati)

是の如く、是等は一般と別々とを滅(否定)するが故に、

//Rkyen-Rnams So-So ḥDus-Pa-La/

(11)「別々と集合との諸縁中に、

/ḥBras-Bu De-Ni Med-Pa-Ñid/

かの果はなきなり、

/Rkyen-Rnams-La-Ni Gaṅ-Med-Pa/

諸縁中に何ものもなし、

/De-Ni Rkyen-Las Ji-Ltar-Skye// (P.41a).

云何ぞ、そは縁より生ぜん」。

/Na ca vyasta-samasteçu

「略廣因縁中、 別々と總體との縁に於て、

prat ayeṣu ca asti tat palaṁ/

求果不可得、 その果は 存在せず、

pratyayebhyaḥ kathaṁ tac ca

因縁中、若無、 縁中に存せざる其者は

bhavena na pratyayeṣu yat/ (P.87)

云何從縁出。」 如何ぞ そは縁より生ぜん。

/ In den getrennten und vereinigten Bedingungen ist nicht jene Frucht.

Was aber in den Bedingungen nicht ist, wie entsteht das aus Bedingung? / (P.13).

別々と集合との諸縁 (Rkyen-Rnams) 中には、かの果は無なりとせば、別々と集合との諸縁中には何ものもなし。かの縁より(何物かの)生ずることは不合理なり。

(12)「若し又かの(果は)無なるとも、

//Ci-Ste De-Ni Med-Par Yaṅ/

かの諸緣より生じ得るとせば、　/Rkyen De-Dag-Las Skye-ḥGyur-Na/

尙　非緣より果は、　/Rkyen-Min-Las-kyaṅ ḥBras-Bu-Ni/

何の故に生ぜざるや」。　/Ci-Yi-Phyir-Na Skye Mi-ḥGyur/ (P.41a).

「若謂緣無果、　或は其の無なるものさへも、　/Athā-sad api tat tebhyaḥ

而從緣中生、　それらの諸緣より生ずとせば、　pratyayebhyaḥ pravartate/ (P.87).

是果何不從　何故に非緣よりもまた、　apratyayebhyo' pi kasmān

非緣中而出。」　果は生じ出でざるや。　na-abhipravartate phalaṁ/ (P.88).

/ Würde sie aber, auch ohne zu sein, aus jenen Bedingungen entstehen,

Weshalb auch entsteht nicht aus Nichtbedingung die Frucht? / (P.13).

若し又かの果は無なるとも、諸緣より生ずべしと思惟すれば、然らば又かの(果)の無に似たる非緣(Rkyen-Ma-Yin-Pa)より何が故に生ぜざるや。

此に問て言く、汝はかの緣と非緣と稱する總てのものは存するや、此に釋して曰、

(13)「果は緣より生ずとすれど、　//ḥBras-Bu Rkyen-Las Byuṅ-Yin-Na/

諸緣は自己より生ずるに非ず、　/Rkyen-Rnams Raṅ-Las Byuṅ-Ma-Yin/

自己非生より總ての果は(生ぜば)、　/Raṅ-Byuṅ-Min-Las ḥBras-Bu-Gaṅ/
そは如何ぞ緣より生ぜん」。　/De-Ni Ji-Ltar Rkyen-Las-Byuṅ// (P.41a)
「若果從緣生、　果は緣よりの所成にして、　/Phalaṁ ca pratyaya mayaṁ
是緣無自性、　而も緣は自己の所成ならず、　pratyayāç ca-asvayaṁmayāḥ/
從無自性生、　自己非所成より生ずるその果は、　phalaṁ asvamayebhyo yat
何得從緣生」。　如何ぞ　その緣の所成ならんや。　tat pratyayamayaṁ kathaṁ// (P.88)

/ Während die Frucht aus den Bedingungen entstanden ist, sind die Bedingungen nicht von selbst entstanden.

Die Frucht, die aus nicht von-selbst-Entstandenem ist, wie ist die aus Bedingung entstanden? (P.14).

(14)「この故に(果は)緣より生ずるに非ず、　//De-Rhyir Rkyen-Las Byuṅ-Ma-Yin/
非緣より生ずる果は存せず、　/Rkyen-Min-Las-Byuṅ ḥBras-Bu-Ni/
果なきを以ての故に、　/Yod-Min ḥBras-Bu Med-Pas-Na/
非緣を緣とするも何處にか成せん。」　/Rkyen-Min Rkyen-Du Ga-La-ḥGyur/ (P.41b)

「果不從緣生、　それ故に果は緣所成に非ず、　/Tasmān na pratyayamayaṁ

不從非緣生、　緣所成ならざるにも非ず、　nā' pratyayamayaṁ Phalaṁ/

以果無有故、　果のなきとき　phalā' bhāvāt pratyayā' prat-

緣非緣亦無。」　何處にか所緣もあらん。　yayāḥ kutaḥ/ (P. 89).

/ Deshalb aus Bedingung nicht entstandene, aus Nicht-bedingung entstandene Frucht Existiert nicht. Wenn Frucht nicht ist, wo sind Bedingungen und Nichtbedingungen? / (P. 14).

汝が緣と非緣とは存在すと言へるかのあらゆる說明に付て釋すべし。これ汝は先きに果は緣より生ずるなりと言へるも、是の如く思惟することは、そは正しくとも、能く觀察するに、諸緣は果に似るのみにて、自性 (Prakṛiti Raṅ-bShin) より生ずるに非ず。緣は自性より生ずるに非ざるが故に、かの總て發生する果は、云何ぞ緣 (Pratyaya, Rkyen) より生ずと云ふことは正しかるべき。かるが故に、又果は緣より生ずることなきが故に、又非緣よりも生ずることなし。果なきが故に、非緣と諸緣とは尙果に似たるのみにして、自存 (Svabhāva, Ṅo-Bo-Ñid 自性) に由て存するに非ず、幻化の如きものなり。

阿闍梨耶聖龍樹 (Nāgārjuna, Klu-Sgrub) に依て造られたる「根本中(論)無畏疏」內、「觀因緣」と名

けらるゝ第一品なり。(Rkyen-bRtag-Pa Shes-Bya-ba-Ste Rab-du-Byed-Pa Daṅ-Po).

「觀去來品」第二 (①Gata-agata-gamyamāna)

此に問て言く、こゝに三時(世)の住位の諸の所作(kṛiya, Bya-Ba)を現はすなり、三時の住位を計量せらるゝに由て、②已去と ③未去と ④往と云へる其等を廣說す、この故に所作は存すべし。

此に釋して曰、

(1)「只 已去中には⑤現去なし、 //Re-Shig Soṅ-La ⑥ḥGro-Ba-Med/

未去中にも、また現去なし、 /Ma-Soṅ-Ba-Laḥaṅ ⑦ḥGro-Ba-Med/

已去と、未去とを除きて、 /Soṅ-Daṅ Ma-Soṅ Ma-gTogs-Par/

かの往は知るべからず」。 /bGom-Pa Çes-Par Mi-ḥGyur-Ro//

「已去無有去、 且つ已去は去かれず、 /Gataṅ na gamyate tāvad

未去亦無去、 未去も 亦去かれず、 agataṅ naiva gamyate/

離已去未去 已去と 未去とを除きて、 gata-agata-vinirmuktaṅ

去時亦無去。 去きつゝあることも亦去かれず。 gamyamānaṅ na gamyate// (P.92).

/ Im Gegangenen eben ist nicht Gehen, im (noch) nicht Gegangenen auch ist nicht Gehen,

Ohne Gegangenes und (noch) nicht Gegangenes wird ein (gegenwärtiges) Gehen nicht wahrzunehmen sein / (P. 15).

此に「只已去の中には現去なし」、已去し了ればなり。所作を離れては所作 (Bya-Ba) は認むべからざればなり。「未去の中にも(また)現去なし」、現去なければなり。「往」中にも亦現去なし、「已去と未去とを除きて、「往」はなければなり。燈火と、焰との如し、(P.41b).

① 梵品名	/Gagta-agata-parīkṣā nāma dvītīyāṁ-prakaraṇam/
② 已去	Gata, Soṅ ; Das Gegangene. ; 去きしこと。
③ 未去	Agata, Ma-Soṅ ; nicht Gegangene. ; 去かざること。
④ 往	Gamyamāna, bGom-Pa ; 趣行、漢譯 去時、Gehende. ;「去きつゝあること」
⑤ 現去	Gamanaṁ, ḥGro-Ba. ; 漢譯 去又 去法、Gehen , 去く。
⑥ 月稱譯	Mi-ḥGro-Ste (現去せずして)
⑦ 月稱譯	Gro-Ba-Min (現去せず)(P.92).

此に問て言く、

(2)「何處に動くも其處には現去あり、　//Gaṅ-Na gYo-Ba De-Na-ḥGo/

彼(動)は又總ての往中に於てす、　/De-Yaṅ ①Gaṅ-Gi bGom-Pa-La/

動は已去にあらず、未去にあらず、　/gYo-Ba Soṅ-Miṅ Ma-Soṅ-Min/

是の故に往中に現去あり」(以下原文四十二右)　/De-Phyir hGom-La ḥGro-Ba Yod//

「動處則有去　動のあるところ、其處に其去あり、/Ceṣṭā yatra gatis tatra

此中有去時、　そして動は去きつゝあるときにあり、gamyamāne ca sā yataḥ/

非已去未去、　已去に於ても未去に於てもなし、　na gate na-agate ceṣṭā

是故去時去。　それ故に去きつゝあるときに去あり。gamyamāne gatis tataḥ// (P.93).

/ Wo Bewegung, da ist Gehen. Und weil in dem gegenwärtigen Gehen, Bewegung ist, nicht im Gegangenen, nicht im noch nicht Gegangenen, deshalb existiert im gegenwärtigen Gehen Gehen. / (P.15).

此に「何處に動の現はれば、其處には現去あり」、何故とならば、「彼(動)は又往(去時)中に現はる、されど動は已去中に現はれず、未去中にも現はれず、是の故に往中にもまた現去あり。

① 月稱譯　Gan-Phyir (何が故に) (P. 93).

此に釋して曰、

(3)「往中に現去ありとは　//bGom-La ḥGro-Ba Yod-Par-Ni/

云何にして認めらるゝや、　/Ji-Lta-Bur-Na ḥThad-Par-ḥGyur/

凡ての時、現去なければ、　/Gaṅ-Tshe ḥGre-Ba Med-Pa-Yis/

往は認むることなければなり」。　/bGom-Pa ḥThad-Pa Med-Phyir-Ro//

「云何於去時、　去きつゝあるときの去は、　/Gamyamānasya gamanaṁ

而當有去法　如何にして生ぜんや、　kathaṁ nāma-upapatsyate/

若離於去法　實に去きつゝあるときに去なし、　①gamyamāne hy-agamanaṁ

去時不可得」　その時(去は)決して生じ得ざるが故に。　yadā naiva upapadyate/ (P.94).

/ Wie wird als gegenwärtiges Gehen Gehen als existierend möglich sein,

Wenn als Nicht-Gehen gegenwärtiges Gehen nicht möglich ist? / (P.16).

此に往中(去護時譯)中に現去(去護注)あることは認むべからず、何故に言ふとならば、是の如く現去なきところの往は決して把認すべからざればなり。石女 (Mo-gçam, 兒を孕まざる女) の如し。

① 月稱の註釋　梵偈 /Gamyamāne dvi-gamanaṁ「去きつゝあるときに二の去あり」、Yadā naiva-upapadyate/「その時は(二の去は)生じ得ざるが故に」。

復曰、

(4)「總ての①往中に②現去あらば、　//Gan-Gi ③bGom-La ḥGro-Yo-Pa/

かの往中に現去なし(といふ)も、　/De-Yi bGom-La ḥGro-Med-Par/

過失となるべし、何故ぞや、　/Thar-Bar ḥGyur-Te Gaṅ-Gi-Phyir/

往(の意味)を了解すればなり」。　/bGom-Ba ④khoṅ-Du Chu d-Phyir-Ro//

「若言去時云、　去きつゝあるものゝ去ありといふ、/Gamyamānasya gamanaṁ

是人則有」咎、　その人に付て過あり、　yasya tasya prasajyate/

離去有去時　去を離れて去きつゝあるもの有るべし、　rite gater gamyamānaṁ

去時獨去故」。　何となれば去きつゝあるものは去あるが故に。　gamyamānaṁ hi gamyate/

/ (Nach) wessen (Annahme) im (jetzt) Gehenden Gehen ist, bei dem würde im (jetzt) Gehenden nicht Gehen zutreffen. Weshalb? Weil (nur) (jetzt) Gehendes wahrgenommen wird. / (P.16).

こゝに或ものゝ宗に於て、「往中に現去ありと謂はゞ、かの往中に現去なしと(云ふ)も過失となるべし」。(そは是れ)無關係を成立すべしと云へる語な(れば)なり。何の故に然るや、「何故とならば「往」を了解するが故にして、この(往の)語に執着すればなりと、そはまた謂ふべからず。この故に往中に現去ありと云ふは正しからず、(譬へば)跛者の(歩むが)如し(跛者は杖に倚る如く、現去は往に依て可能なればなり。)

① 往　Gamyamānaṁ, bGom-Pa; 漢譯去時、進行。

② 現去　Gamanaṁ ḥGro-Ba; 漢譯去法。

③ 月稱譯　bGom-Pa-La ḥGro-Ba (往中に現去「あらば」)(P. 95).

④ 同　上　bGom-La ḥGro-Ba-Yin Phyir-Ro (往中に現去あるが故に)。

復曰

(5)「往中に現去あらば、　//bGom-La ḥGro-Ba Yod-Na-Ni/

現去は二(種)の失となるべし、　/ḥGro-Ba gÑis-Su Thal-ḥGyur-Te/

かの總ての(現去)に由ての往と、　/Gaṅ-Gis bGom-Pa De-Daṅ-Ni/

かの(往)中に於ける總ての現去となり」。　/De-La ḥGro-Ba Gaṅ-Yin-Paḥo//

「若去時有去、　去きつゝあるものゝ去に於て、　/Gamyamānasya gamane

則有二種去、　二の去が結び付きてあり、　prasaktaṁ gamanadvayaṁ/

一謂爲去時、　それに由て去きつゝありとゝふもの　yena tad gamyamānaṁ ca

二謂去時去」。　そこに其は復去とゝふものとなり。　yac cātra gamanaṁ punaḥ// (P.95).

/ Wenn im (jetzt) Gehenden Gehen ist, so trifft ein zweifaches Gehen zu;

(Das eine), wodurch es (jetzt) Gehendes ist, (Das zweite) das Gehen, das in ihm ist. / (P.16).

此に往中に現去ありと謂はゞ、現去は二種の失となるべし。云何に然るや。

(一)かの總ての現去に由ての「往」と稱せらるものと、(二)又かの(往)中に於ける總ての現去となるべし。

復曰、

(6)「①現去は二(種)に墮すれば、 //ḥGro-Ba gÑis-Su Thal-Gyur-Na/

②現去者も亦二種となるべし、 /ḥGro-Ba-Po Yaṅ gÑis-Su-ḥGyur/

何故となれば、現去者なければ、 /Gaṅ-Phyir ḥGro-Po Med-Par-Ni/

現去は認むべからざればなり」。 /ḥGro-Ba ḥThad-Par Mi-ḥGyur-Phyir//

「若有二二去法、 二の去が過として結附くときに、 /Dvau gantārau prasajyete

則有二二法者、 二の去者が結付くべし、 prasakte gamadvaye/

以離於去者、 何故とならば去者を離れては、 gantāraṅ hi tiraskṛītya

去法不可得」。 去は生ぜざるが故に。 gamanaṅ na-upapadyate/ (P.96).

/ Wenn Gehen zweifach zutrifft, so treffen auch zwei Geher zu (Prasajyate),

Weil ohne Geher Gehen nicht möglich ist / (P.16).

此に現去は二(種)の過に墮すれば(以下原文四十二左)現去者も亦二(種)となるべし。何故に然るや、何故となら

ば、現去者なければ現去は認むべからざればなり。二(種)の現去と、二(種)の現去者とに墮すべしと、そは謂ふべからず、この故に往中に現去ありと云ふは、これ正しからず、頭を斷ずるが如し。

① 現　去　　Gamanaṁ, ḥGro-Ba; 漢譯去法。

② 現去者　　Gantāraṁ, ḥGro-Ba-po; 漢譯去者、又人、Geher. (三世統一者)

此に問て言く、現去者なくば現去は認むべからずと云ふは然り。この故に現去者は三時に於ける正住(依止)なるが故に、依止 (Āçraya, Rten-pa, der bedingende, Gegenstand) の現去あり。

此に釋して曰、

(7)「若し現去者なかりせば、　　//Gar-Te ḥGro-Bo Med-Gyur-Na/

現去は認むべからず、　　/ḥGro-Ba ḥThad-par Mi-ḥGyur-Te/

現去なくば、現去者は、　　/ḥGro-Ba Med-Na ḥGro-Ba-Po/

何處にか存せん」。　　/Yod-Pa-Ñid-Du Ga-La-ḥGyur//

「若離於去者、　若し去者を離れば、　　/Gantāraṁ cet tiraskṛitya

去法不可得、　去は生ぜず、　　gamanaṁ na-upapadyate/

以無去法故、　去のあらざるに於て、　　gamane' sati gantātha

何得レ有ニ去者一。」　何處にか去者あらん。　kuta eva bhaviṣyate/ (P.97).

/ Wenn ohne Geher Gehen nicht zutrifft, Wenn Gehen nicht zutrifft, wo wird der Geher existieren? / (P.17).

總ての時、現去者なくば、その時、現去は認むべからず。今云何ぞ現去なきとき現去者は存せん、そは現去者は必ず三時に於ける正住(依止)なりと皆言へども、そは正しからざるなり。

復曰、

(8)「只　現去者は去かず、　//Re-Çig ḥGro-Po Mi-ḥGro-Ste/

非現者も去かず、　/ḥGro-Ba-Po-Min ḥGro-Ba-Min/

現去者と、非現去者より別なる、　/ḥGro-Po ḥGro-Po-Min-Las gShan/

第三者の何れをも去かず。①」　/gSum-Pa Gaṅ-Shig ḥGro-Bar-ḥGyur//

「去者則不レ去、　去者も去かざる限り、　/Ganatā na gacchati tāvad

不去者不レ去、　非去者も決して去かず、　agantā naiva gacchati/

離ニ去、不去者一　而して去者と非去者と別なる、　anyo gantur agantuç ca

無ニ第三去者一。」　第三の何者か去かん。　kas tṛitiyo hi gacchati//

/ Der Geher eben geht nicht, der Nicht-Geher geht nicht; Vom Geher und Nicht-Geher verschieden geht welcher Dritte? / (P. 17).

此に現去者は去き得べし、或は非現去者は去き得べし。或は彼二者より別なる第三者は去き得べしと計慮するとも、そこに更に現去者は去かざるなり。現去あらざればなり。非現者も亦去かざるなり、現去なければなり。彼(二)者より別なる第三者も亦去かず、(斯るもの)なければなり。若し存せば、そは現去者か、或は非現者なるべしと計慮すとも、彼二者もまた現去を認むべからず。この故に、そは正しからず。

① 原文 ḥGro-bar-ḥGyur は ḥGro-Mi-ḥGyur の誤。梵文「去く」は「去かず」の誤。

復曰、

(9)「只　現去者は現去すと云ふ、

云何ぞ認むるを得んや、

現去なければ、現去者は、

決して認むべからず」。

//①Re-Shig ḥGro-Po ḥGro-ḥo shes/ (P. 43a).

/Ji-Ltar ḥThad-Pa-Ñid-Du ḥGyur/

②ḥGro-Ba Med-Na ḥGro-Ba-Po/

/Nam-Yaṅ ḥThad-Par Mi-ḥGyur-Ro//

「若言去者去、　實に去者が去くといふことは、

/Gantā tāvad gacchati iti

云何有此義、　云何ぞ生ずべきや、　kathaṁ eva upapatsyate/

若離於去法、　去を離れては、　gamanena vinā gantā

去者不可得」。　去者は決して生ぜざるときに。　yadā naiva upapadyate// (P.98).

/ „Der Geher geht“: wie soll das denn möglich sein,

Wenn ohne Gehen ein Geher niemals möglich ist? / (P. 17).

此に現去者は現去すと云ふ、そのあらゆるものに耽着すとも、そは認むべからず。何故に然か言ふや。現去なくば、現去者は決して認むべからざればなり。

① 月稱譯　第一句 Gaṅ-Tshe ḥGro-Ba Med-Par-Ni（何時も現去なければ）は、本譯第三句に相應す。

② 同　譯　第三句 Re-Shig ḥGro-Po ḥGroḥo-Shes（更に現去者は現去すといふ）は、本譯第一句に相應すれど、月稱譯と、本譯の原典相違を知るべし。

(10)「總ての場合に、現去者は現去すと(云ふ)、　//①Gaṅ-Gi Phyogs-La ḥGro-Ba-Bo/

かの(現去者)中には現去なし、されど、　/ḥGro-Ba De-La ḥGro-Med-Paḥi/

現去者ありと(の失に)墮すべし、　/ḥGro-Bo Yin-Par Thal-ḥGyur-Te/

(そは)現去者は現去すと謂へばなり」。　/ḥGro-Bo ḥGro-Bar ḥDod-Phyir-Ro//

「若謂去者去、　實に去者は去くといふ命題を、　/Pakṣo gantā gacchati-iti
是人則有咎、　有する其の人には過失あり、　yasya tasya prasajyate/
離去有去者　そは去なくして、　gamanena vinā gantā
說去者有去」。　去者の去を希望するが故に。　gantur gamanam icchataḥ// (P.98).

/ Nach wessen Ansicht der Geher geht, bei dem trifft zu (prasajyate), dass der Geher ohne Gehen ist,

Da er (bei) dem Geher (überdies) noch ein Gehen fordert (icchati) / (P.117).

此に總ての場合に於て、現去者は現去すと謂ふ、かの(現去者)中には現去なし、されど現去者ありとの(失に)墮すべし。何が故に然か言ふや、是の如く現去者は現去すと謂へばなり。

① 此の藏文偈は次のと相前後す。

復曰、

(11)「若し現去者は現去するならば、　//Gar-Te ḥGro-Bo ḥGro-Gyur-Na/
現去は二(種の失)に墮すべし、　/ḥGro-Ba gÑis-Su Thar-ḥGyur-Te/
或ものは現去者に於て顯かに(現去を知るもの)と、　/Gaṇ-Gis ḥGro-Bor mÑoṇ-Ba-Daṅ/

或ものは現去者となりて現去(を知る)となり」。 /ḥGro-Bor Gyur-Nas Gan ḥGro-Baḥo//

「若去者有去、 若し去者は去くならば、 /Gamane dve prasajyete

則有二種去、 二の去(ありて)過失となる、 gantā yady uta gacchati/

一謂去者去、 それに依て去者と呼ばるゝものと gaitā-iti co'jyate yena

二謂去法去」。 去者あつてそれを去るところのものとなり。 gantā san yacca gacchati// (P.99).

/ Wenn der Geher geht, so trifft zweifaches Gehen zu:

Das, durch welches er als Geher offenbar wird (ajyate), und das, welches er, als Geher, Geht / (P.18).

現去者は現去すと云へる此場合に於て、二(種)の現法に墮すべし。如何に然るや。或ものは現去は現去者に於て顯かに(知り得るもの)と、或ものは現去者となるに由て、他の現去は後時に現去を(知り)得べしとなり、そは言ふべからず。そこに現去者は三時に於て必ず住すと云ふも、そは正しからず、石女は兒(を産まざる)に於ける如し。

註 漢譯の(10)偈と (11)偈とは前後の順序を轉倒せり、梵漢二譯は相一致す。

是の故に斯く觀察するに、

(12)「已去中に現去の始發なし、　//Soṅ-La ḥGro-Baḥi Rtsom-Med-De/
未去中にも亦現去の始發なし、　/Ma-Soṅ-Ba-La Yaṅ ḥGro Rtsom-Med/
往中に始發あらずば、　/bGom-La Rtsom-Ba Yod-Miṅ-Na/
何處にか現去を始發せしむべき」。　/Gaṅ-Du ḥGro-Ba Rtsom-Bar-Byed//
「已去中無發、　已去中に於て去〻〻〻始發せず、　/Gate na-ārabhyate gantuṁ
未去中無發、　未去に於て去〻〻〻始發せず、　gantuṁ na-ārabhyate' gate/
去時中無發、　始去か發せず、あるときに於て去は　na-ārabhyate gamyamāne
何處當有發」。　何處にか去〻〻と始發せんや。　gantuṁ ārabhyate kuha/ (P.100).

/ Im Gegangenen fängt Gehen nicht an, im (noch) nicht Gegangenen auch fängt Gehen nicht an ; Wenn im (jetzt) Gehenden ein Anfang nicht ist, wo denn fängt Gehen an? / (P.18).

復曰、

(13)「現去を始發する前に於て、　//ḥGro-Ba Rtsom-Paḥi Sṅa-Rol-Na/
何處にか現去を始發し得ん、　/Gaṅ-Du ḥGro-Ba Rtsom-ḥGyur-Ba/
往なくして、已去もなし、　/bGom-Pa Med-Ciṅ Soṅ-Ba-Med/

未去に(於て)は何處にか現去あらん」。 /Ma-Soṅ ḥGro-Ba Ga-La-Yod//

「未發無去時、 去の始めより以前には、 /Na-pūrvaṁ gamana-ārambhād

亦無有已去、 現去と又已去とはなし、 gamyamānaṁ na vā gataṁ/

是二應有發 去の始まるところに(於て)、 yatra-ārabhyeta gamanaṁ

未去何有發」。 未去に於て何處にか去あらん。 agate gamanaṁ kutaḥ// (P.100).

/ Vor dem Anfang des Gehens ist, wo das Gehen anfängt, nicht das (jetzt) Gehende, nicht das Gegangene.

Wie ist in dem (noch) nicht Gegangenen Gehen? / (P. 18).

(十一)「現去の始發は一切の相に於て、 //ḥGro-Rtsom Rnam-Pa Thams-Du/

現はるゝことなくば、 /Snaṅ-Pa Med-Pa-Ñid Yin-Na/

已去とは何ぞ、往とは何ぞや、 /Soṅ-Ba Ci-Shig ḥGom-Pa Ci/

未去とは何ぞやと完全に分別せらるべきや。」 /Ma-Soṅ Ci-Shig Rnam-Par bRtag//

「無去無未法、 去に付て、總ての方面に於て、 /Gataṁ kiṁ gamyamānaṁ

亦復無去時、 始めが見られざるときに、 kiṁ agataṁ kiṁ vikalpyate/

一切無有發、　云何なる已去、云何なる現去、　ādṛiçyamāna ārambhe
何故而分別」。　云何なる未去が了別せられん。　gamanasya-iva sarvathā// (P. 101).

/ Wie wird das Gegangene, wie das (jetzt) Gehende, wie das (noch) nicht Gegangene unterschieden (vorgestellt) (vikalpyate)? 1 (P.18).

(以下原文四十三左)現去の始發する前に於て、何處にか現去を始發するを得ん。(そは)往もなく、已去もなし。未去に於て現去を始發すべしと思惟するも、そは亦不合理なり。何故に然か云ふや。未去其者の存在はあらざればなり。未去に於て現去は始發すべしと(云ふ)は何處にかあらむ。是の故に現去の始發は一切相に於て現はることなくば、已去と往(漢譯去時)と、未去と云へる三時の云何なる分別も、其等は云何ぞ完全に分別せらるべき。①心を(我と我所とに)分別するが如し。

①Sems-bRtags-Pa bShin-No, Citta-vikalpa-iva; Wie das Unterscheiden der Gedanken (by Walleser).

此に問て言く、現去者の止(住)することありと、此に釋して曰、

(15)「只現①去者は止(住)すべからず、　//Re-Shig ḥGro-Bo Mi-Sdod-De/
非現去者も止(住)するに非ず、　/ḥGro-Ba-Po-Min Sdod-Pa-Min/
現去者と非現去者とより別なる、　/ḥGro-Bo ḥGro-Po Min-Las gShan/

第三者の何れか止(住)するを得べき」。 /gSum-Pa Gaṅ-Shig Sdod-Par-ḥGyur//

「去者則不住、 去者は住せざる限り、 /Gantā na tiṣṭhati tāvad

不去者不住、 非去者も實に住せず、 agantā naiva tiṣṭhati/

離去不去者、 去者と非去者とより別なる、 anyo gantur agantuç ca

何有第三住。」 第三の何ものか住せん。 kas tṛitīyo' tha tiṣṭhati// (P.101).

/ Der Geher steht eben nicht, ein Nicht-Geher steht nicht.

Welcher vom Geher und Nicht-Geher verschiedener Dritter sollte stehen? / (P.19).

此に現去者は止(住)し得るや、或は非現去者は止(住)し得るや、或は二者より別なる第三者が止(住)すべしと計慮するとも、そは只現去者は止(住)すべからず、現去あればなり。非現去者もまた止(住)すべからず、現去なければなり。現去の不相應の場合は止(住)することあればなり。かの二者より別なる第三者も亦止住すべからず、無ければなり。何れか存在せば、そは現去者か、或は非現去者なるべしと計慮すとも、二者の如きも亦阻止せらるなり、この故に現去者は止(住)するなりと云へど、そは不合理なり、砂中に於ける穀物の如し。

① 現去者　　漢譯去者。

(16)「何時も現去なければ、　// Gaṅ-Tshe ḥGro-Ba Med-Par-Ni/

現去者は認むべからず、　/ḥGro-Po ḥThad-Par Mi-ḥGyur-Na/

只　現去者は止(住)すといふ、　/Re-Shig ḥGro-Po Sdod-Do Shes/

云何に認めらるべきや」。　/Ji-Ltar ḥThad-Pa-Ñi-Du ḥGyur//

「去者若當住、　只　去者は住すといふ、　/Gantā tāvat tiṣṭhati-iti

云何有此義、　實に云何にして(生じ得るや)、　katham eva-upapatsyate/

若當離於去、　去を離れて去者は、　gamanena vimā gantā

去者不可得」。　決して生ぜざるときに。　yadā naiva-upapadyate// (P.102).

/ Wie wird denn „Der Geher steht" möglich sein?

Ohne Gehen ist ein Geher niemals möglich. / (P.19).

現去なくば現去者は決して認められず、現去者は止(住)すと云ふ、彼のあらゆるものを現に執着すれど、そは認むべからず(以下四頁右)何の故に然るや、現去者なくば、現去者は決して認められざればなり、極微① (Paramāṇa, Rdul-Phra-Rab) は存在すと云ふが如し。

① Die Atome existieren (by Walleser).

(17)「往よりも止(住)するを得ず、 //bGom-Las Sdod-Par Mi-ḥGyur-Te/

已去と未去よりも亦(止住)せず」、 /Soṅ-Daṅ Ma-Soṅ-Las kyaṅ-Min/

「去未去無住、 現去と、已去と、未去とより、 /Na tiṣṭhati gamyamānān na

去時亦無住」。 離れては 去は住せず。 gatān nā' gatād api/ (P.162).

/ Vom (jetzt) Gehenden weg ist nicht stehen, nicht vom Gegangenen, nicht vom (noch) nicht-Gegangenen / (P.19).

今かの現去者より(離る)も止るべからず。或は已去と未去より(離る)も止るべからずと計慮すると、尙かの三部より(離る)も止るべからざればなり。そこに現去者の止ありとの彼の説明は正しからず、石女の兒の死するが如し。今は、

「現去の行と、 /ḥGro-Ba Daṅ-Ni ①ḥJug-Po-Daṅ/

止とは又現去に同じ」。 /②Ldog-Pa Yaṅ-Ni ③ḥGro-Daṅ mTshuṅs//

「所有行、止法、 現行なると、止なるとの去は、 /Gamanaṅ saṅpravṛittiç ca

皆同=於去義。」 去と等しきなり。 nivṛittiç ca gateḥ samā/ (P.103).

/ Gehen, Tätigkeit (eig. Fortschreiten, pravṛtti), Untätigkeit (Aufhören, nivṛtti) sind auch dem Gehen gleich. / (P.19).

應に②現去を廣く思惟するに從つて、行と止とは、また現去に同じと思惟すべきなり。

① ḥJug-po＝Saṁpravṛitti（行）、但　十二因緣の行は ḥDu-Byed (Saṁskāra) なり。

② Ldog-pa は本偈漢譯、并に月稱譯には Ldog-Par(nivṛitti, 止)とあり。

③ 現　去　　漢譯去法。

今現去と現去者とは、又其者にも、異にもあらず、云何に然か云ふや、釋して曰、

(18)「かの現去と、現去者とは、　//ḥGro-Ba De-Daṅ ḥGro-Ba-Po/

又其者なりと云ふも不可なり、　/De-Ñid Ces-kyaṅ Byar-Mi-Ruṅ/

現去と、現去者とは、　/ḥGro-Ba Daṅ-Ni ḥGro-Ba-Po/

又異なりと云ふも不可なり」。　/gShan-Ñid Ces-kyaṅ Byar Mi-Ruṅ//

「去法卽去者、　かの去は卽ち去者なりといふ、　/Yad eva gamanaṁ gantā

是事則不然、　そのものは正しからず、　sa eva-iti na yujyate/

去法異去者、　復　去者は去より、　anya eva punar gantā

是事亦不然」。　異なりといふも正しからず。　gater iti na yujyate// (P.104).

/ Das Gehen und der Geher sind nicht als dasselbe (identisch) möglich. (P.19).

Das Gehen und der Geher sind auch nicht als verschieden möglich. / (P.20).

此に問て言く、過失は云何になるや、釋して曰、

(19)「若し現去の云何なるものも、 //Gar-Te ḥGro-Ba-Gaṅ-Yin-Pa/

其者は現去者なりとせば /De-Ñid ḥGro-Po Yin-Gyur-Na/

作者と、業とは、 /Byed-Pa-Po Las-Ñi Daṅ/

同一の過失となるべし。」 /gCig-Pa-Ñid-Du Thar-Bar-ḥGyur//

「若謂於去法、 若し去は即ち、 /Yad eva gamanaṁ gantā

即爲是去者、 去者なりとせば、 sa eva hi bhaved yadi/

作者及作業、 其者は實に作者と作業との、 ekibhāvaḥ prasajyeta

是事則爲一」。 同一性が結付くべし。 kartuḥ karmaṅa eva ca/ (P.104).

/ Wenn, was Gehen ist, das eben der Geher wäre,

Dann würde der Täter und das Tun als eines (identisch) eben zutreffen. / (P.20).

(20)「若し現去と、現去者とは、 //Gal-te ḥGro-Daṅ ḥ①Gro-Ba-Bo/

異なりと觀せば、　/gShan-Pa-Ñid-Du Rnam-bRtag-Na/

現去者なき現去と、　/ḥGro-Po Med-Paḥi ②ḥGro Ba Daṅ/

現去なき現去者となるべし」。　/ḥGro-Ba Med-paḥi ḥGro-Bor-ḥGyur//

「若謂於去法、　若し復、去者と、去とは、　/Anya eva punar gantā

有異於去者、　即ち別異なりと分別せられば、　gater yadi vikalpyate/

離去者有去　去者を離れて去あるべし、　Gamanaṃ syād ṛite gantur

離去有去者。」　去を離れて去者あるべし。　gantā syād gamanād ṛite// (P.105).

/ Wenn Gehen und Geher als verschieden betrachtet (eig. unterschieden) werden,

So ist ohne Geher das Gehen, und ohne Gehen der Geher. / (P.20).

① 去者　gantā, ḥGro-ba-po.

② 去　gamanaṃ, ḥGro-pa.

(21)「あらゆる①存在は同一なるか、　//Gaṅ-Dag dÑos-Pa gCig-Pa Daṅ/

存在は異なるかは、　/dÑos-Po gShan-Pa-Ñid-Du-Ni/

成立し得ることあるなし、　/Grub-Par Gyur-Pa Yod-Min-Pa/

云何ぞかの二の成立あらん」。 /De-gÑis Grub-Pa Ji-Ltar-Yod//

「去、去者是二、 若は同一性、若は別異性によりても、 /Ekabhāvena vā siddhir

若一異法成、 成就なりといふ、 nānābhāvena vā yayoḥ/

二門俱不成、 その二のものゝ成就は、 Na vidyate tayoḥ siddhiḥ

云何當有成」。 實に云何にしてあらんや。 kathaṁ nu khalu vidyate/ (P.105).

/ Die (zwei), welche nicht als ein Ding und nicht als verschiedene Dinge (bhāva) Erreicht werden, wie werden diese zwei erreicht? / (P.20).

父と子とに於けるが如し。

① 存在 Bhāva, dÑos-Po; Ding, 漢譯 物。

又復曰、非現去は其者(一體)となるが故に、今また現去者も成ずべからず。云何に然か言ふや。釋して曰。(以下原文四十四左)

(22)「現去は誰が現去者なるを顯かにすべき、 //ḥGro-Ba Gaṅ-Gis ḥGro-Bor-mÑon/

かの現去は、かの現去にあらず、 /ḥGro-Ba De-Ni De-ḥGro-Min/

何が故ぞ、(そは)現去の前になし、 /Gaṅ-Phyir ḥGro-Baḥi Sṅa-Rol-Med/

誰が何に現去すべきぞ」。　/Gaṅ-Shig Gaṅ-Du ḥGro-Bar-ḥGyur//

「因去知去者、　その去を以て去者と呼ばれるところ、　/Gatyā yayo' jyate gantā

不能用是去、　その去と去者は去ることなし、　gatiṅ tāṅ sa na gacchati/ (P.105).

先無有去法、　何故ぞ、彼は去より前に存在す、　yasmān na gatipūrvo' sti

故無去者去。」　誰か何に去くことなし。　kaçcit kiṅ cid dhi gacchati/ (P.106).

/ Das Gehen, durch welches er als Geher erscheint, das Gehen geht er nicht;

Weil er nicht vor dem Gehen ist; wer geht wohin? / (P.20).

「現去」は誰が現去者なるを顯にせん。箭を射るところの現去(進行)は、かの現去者(射手)をして現去(進行)せしむるに非ず。何故に然か言ふや、何故とならば、かの現去の前に於て、現去者なし。例せば男と女との孰れも、村落、若は町の何處へも(思ひのまゝに)行き得るものなければなり。

又復曰、

(23)「誰か現去は現去者なるを顯にするか、　//ḥGro-Ba Gaṅ-Gis ḥGro-Bor-mNon/

かれより異なれば、そは現去にあらず、　/De-Las gShan-Pa De ḥGro-Min/

何故ぞならば、獨りの現去者中には、　/Gaṅ-Phyir ḥGro-Bo gGig-Bu-La/

二の現去は認むべからず」。 /ḥGro-Ba gÑis-Su Mi-ḥThad-Do//

「因去知去者、 その去によつて、去者と呼ばるところの Gatyā yayo' jyate gantā

不能用異去、 彼の別なる去と彼は去くことなし tato' nayāin sa na gacchati/

於一去者中、 何となれば一者の去りつゝあるときに Gatī dve no' papadyete

不得二去故」。 この去は不可得なるが故に。 yasmād eke pragacchat/ (P.106).

/ Das Gehen, durch welches er als Geher offenbar wird, ein von diesem verschiedenes geht er nicht, Weil bei einem Geher zwei (faches) Gehen nicht zutrifft. / (P.20).

誰が現去を現去者なりと見るや。箭を射るところの其の現去(進行)より、又異れる現去者(射手)を現去(箭の進行)せしむるものにあらず。何の故に然か云ふや。何故とならば、獨りの現去者中には、二の現去は認むべからざればなり。一の種子の中に、二の芽(あらざるが)如し。

又復曰、

(24)「實有①となれる現去者は、 //ḥGro-Bo Yin-Par Gyur-Pa-Ni/

三種の現去に去かしめず、 /ḥGro-Rnam gSum-Du ḥGro-Mi-Byed/

非實有②となれる彼も亦、 /De-Ma-Yin-Par Gyur-Pa-Yaṅ/

三種の現去に去かしめず」。　/ḥGri-Rnam-gSum-Du ḥGre-Mi-Byed//

「決定有去者、　實有の去者は、　/Sadbhūto gamanaṁ gantā

不能用三去、　三種の去を去かず、　triprakāraṁ na gacchati/

不決定去者、　非實有の彼も亦、　na-asadbhūto' pi gamanaṁ

亦不用三去。」　三種の去を去かず。　triprakāraṁ sa gacchati/ (P.107).

/ Ein seiender Geher geht nicht dreifaches Gehen. Ein nichtseiender Geher auch geht nicht dreifaches Gehen / (P.21).

① 實有　Sadbhūta, Yin-Pa-Gyur-Ba, 漢譯決定。

② 非實有　Ma-Yin-Par-Gyur-Ba, asadbhūta, 漢譯未決定。

③ 月稱譯原文　Ma-Yin-Par-Ni-Gyur-De-Yaṅ（かの非實有になれるも亦）

(25)「又①實有と②非實有とは、　//Yin Daṅ Ma-Yin-Gyur-BaYaṅ/

三種の現去に去かしめず、　/ḥGro Rnam-gSum-Du ḥGro-Mi-Byed/

この故に現去と。現去者と、　/Deḥi-Phyir ḥGro-Daṅ ḥGro-Bo Daṅ/

③去かるべきものは存在せず」。　/bGrod-Par-Bya-Baḥaṅ Yod-Ma-Yin//

「去法、定、不定、　實有と、非實有なる去者も、　/Gamanaṁ sad asadbhūtaḥ

去者不用三、　三種の去を去かず、　triprakāraṁ na gacchati/

是故去、去者、　この故に去と、去者とに、　tasmād gatiç ca gantā ca

所去處皆無」。　去かるべきものは存在せず。　gantavyaṁ ca na vidyate// (P.107).

/ Ein seiend-(und)-nichtseiender Geher geht nicht dreifaches Gehen.

Deshalb existieren nicht Gehen, Geher und zu Gehendes / (P.21).

幻想(Smig-Rgyu)の如し、實有(Yin-bar-gyur-ba)と云ふは、關係せずに成ずと云へる假說なり。現去と云ふは、去くべきもの(bGrod-bar-Bya-ba, 趣行)と云へる假說なり。三種にと云ふは、已去と、未去と往(bGom-Pa)と云へる假說なり。去かしめずと云ふは、現去を阻止する假說なり。非實有と云ふは、存在せずと云へる語なり。餘は前に說明せるが如し。又實有と非實有と云ふは、前の二種の說明を混合せるものを實際に說明するなり。餘とは前に說明せしが如し。この故にと云ふは、語尾を攝する(の語)なり。何が故に斯く觀察するとならば、それ等は認むべからず。この故に現去と、現去者と去かるべきものとの三(種)も亦存在せざるなり。旋火輪(Alāta-Cakra, mKhal-Mehi hKhor-Lo)の如し。

① 實有　sadbhūta, Yin-Bar Gyur-Ba, Seiend: 漢譯決定。

② 非實有　　asadbhūta, Ma-Yin-Par-Gyur-Ba, nicht seiender；漢譯不定。

③ 去かるべきもの　　Gantavyaṁ, bGrod-bar-Bya-ba., Gehendes；漢譯所去處。

阿闍梨耶聖龍樹に依て造られたる「根本中(論)無畏疏」丙、已來と、未去と、往とを觀ずと名けらるゝ第二品なり。(Soṅ-ba daṅ Ma-Soṅ-ba Daṅ bGom-Pa bRtag-pa Shes-Bya-Ste / Rab-Tu-Byed-pa gÑis-Paḥo)